

小川未明「赤い蠟燭と人魚」論

——母人魚の恨みという枠組みをこえて——

星野 絢子

はじめに

小川未明の童話「赤い蠟燭と人魚」は、大正一〇年二月十六日から二〇日にかけて、「東京朝日新聞」に発表された。大正一〇年六月に、童話集「赤い蠟燭と人魚」（天佑社）に収録されたのが初収となる。

今日まで多くの研究がなされてきた「赤い蠟燭と人魚」であるが、なかでも作品の末尾に関する解釈は、作品の理解に大きく影響すると考えられる。そこでまず、これまでの結末部分を巡る評価、解釈についてまとめておく。

古田足日氏は「近代童話の崩壊」^{註1}の中で、

いうまでもなく、この作品は一個の象徴である。象徴されたものは、幸福を願いながら願いはかなえられなかつたということと、それに対する怒りとふたつのものの融合であろう。つまり、人魚とその娘をめぐる人々の動きには、かなえられない願いが象徴され、あらしは未明の怒りを象徴する。

と述べ、結末部分には人間に対する作者未明の怒りがあるとし

た。また、〈あらしには自己慰安の影がある〉とも述べ、裏切りにあつた人魚をかわいそうに思った未明が、人間に懲罰を与えることによって溜飲を下げたと主張している。

山室静は「小川未明とアンデルセン」^{註2}において、「赤い蠟燭と人魚」とアンデルセンの「人魚姫」とを比較しながら次のように述べる。

一方未明のこの作の場合では、人魚のあこがれははつきりした方向もたず、昇華の道も示されずに、人間の愚劣卑小さに突きあたつて悲惨な結末をとるだけであり、結局人魚は人間を恨んで復讐に出て、自分をも人間をも破滅させるしかない。

結末について山室静は、古田氏の主張した未明の怒りではなく、人魚の恨みによる復讐と説いた。結末部に関しては、関口安義氏なども同じように、人魚が人間を恨み復讐に出て、町を滅ぼしたとする解釈をしている。^{註3}この解釈を踏襲しながら、議論は重ねられ少しずつ広がりを見せてくる。

島山兆子氏は「小川未明「赤い蠟燭と人魚」の研究——「義憤」系列作品における位置——」^{註4}の中で、

母親人魚は、「怒り」を象徴する赤い蠟燭をお宮に灯すことによつて、お宮の「祟り」という間接的な形で、人間への報復を行う。この結末部分は（中略）人間の力を越えた不気味なものを含んでいる。

と述べ、人間を超えた存在であるお宮の神さまが母人魚の願いを叶えたとし、（それほど激しい怒りであるからこそ、神をも動かしたのだ）と書いている。

神さまという人間を超えるものへの注目は本多真由美氏「小川未明の世界『赤い蠟燭と人魚』」にも見られる。この中で本多氏は、（たけり狂う大暴風雨は、自分の信頼を裏切られ、存在を否定された人魚の怒りである）としながら、

人間から見れば異形の人魚が、逆に人間を否定したという解釈もできようが、この結末には、それだけでは説明のつかない何者かの力がある。

そして、ここで問題になるのが、お宮の存在である。人魚の娘が幸福に暮らしていた頃その娘の手になる蠟燭をお宮にあげて、燃えさしを身につけていれば災難に遭わないとしてご利益のあつたお宮が、何故、町を守りきることができなかつたのであろうか。（中略）お宮と人魚とはどのような関係にあつたのであろうか。何も語られることなくすべて不明のままに物語は終っている。

人魚の母親のモノログから端を発したこの物語は、不条理を描いたものといえるだろう。すべてを明確に関係づけることができないままに亡びを迎えてしまうのである。と述べる。本多氏は人魚の復讐から町を守れなかつたという意

味でお宮に注目し、お宮と人魚の関係性にも疑問を投げかけている。だが、お宮について詳しく検討することなく、作品を（不条理を描いたもの）として片付けてしまい、お宮の神さまに関する疑問は解消されない。

一方で、これまで踏襲されてきた、人魚の復讐という解釈に一石を投じる議論も出てきている。木村小夜氏は、「小川未明『赤い蠟燭と人魚』とその周辺」の中で、

母は蠟燭をただ取り返しただけでなく、これまで自分が及ぼしてきたであろう効力をも払い戻すかのように蠟燭の付加価値を反転させ、町を大暴風から衰亡へと導く。（中略）これは、老夫婦を含めて変貌した町に対してのみ向けられた（怨み）の結果だったのか。（中略）それは、自ら価値を見いだしたはずの「人間」世界そのものの否定というだけでなく、「獣物」と「人間」とは対照的だという幻想、またそこでは自分達は「人間」の側に近いという自身の認識の誤りを認めざるを得なかつたということ、あまりにも苦い悔恨がその根底にはある。

と述べ、人魚の母親には恨みだけでなく、根底に悔恨の気持ちがあるとしている。この木村氏の指摘は、母人魚の恨みによる復讐という解釈以外の、新たな可能性を示唆しているように思われる。

これまで見てきたように、結末部分は作者未明の怒りとする説もあつたが、作品の読み方としては、人魚の恨みによる復讐とする解釈が主流となつていく。それに付随する形で畠山氏や本多氏は「神さま」という人間を超えたものに注目するが、神

さまについての議論はほとんどされてない。また人魚の恨みによる復讐とする説が主流の中、木村氏が母人魚に悔恨の情を讀み取り、これまでとは異なる解釈の可能性を示したことは興味深い。以上の先行研究をふまえて、これから次の二つのことについて考えてみたい。

第一には、作品における「神さま」の存在についてである。母人魚がお宮の神さまの力を借りて人間への復讐を果たすと、う畠山氏の論も、なぜかお宮は人魚の復讐から町を守れなかったという本多氏の論も、お宮の神さまに注目しながら、神さまという存在について十分な検討を試みてはいない。まずはこの作品における「神さま」の存在について詳しく見ていきたい。

第二には、木村氏が指摘したように、母人魚の行動を復讐ではなく悔恨と読むことが可能かについてである。ラストシーンにおいて母人魚がお宮の神さまに向かい、蠟燭を上げるといふ行為は、何を意味しているのだろうか。母人魚にとって、神さまとはどのような存在で、何を求めて蠟燭を上げたのだろうか。ここに復讐以外の解釈ができるか、「神さま」について詳しく見た後で考えてみたい。

この論文では、最後に母人魚が向かった「神さま」という存在に注目しながら作品を詳しく検討していくことで、これまでの結末に対する解釈とは違った、新しい解釈の可能性を模索していくことにする。

「人間」と「人間以外」という視線

まず、作中の「神さま」について考える前に、この作品が人

間と人魚の交わりを描いたものであることに注目し、なぜ人魚という設定になるのかということを整理しておきたい。この作品はそもそも、「人間」と「人間以外」を区別する視線の存在によつて成り立っている。同じではない者たちが、互いをどう捉えていたのかを一つずつ確認してみたい。

第一に、母人魚から見た人間像はどうだろうか。

自分たちは、人間とあまり姿は変わっていない。魚や、また底深い海の中に棲んでいる、気の荒い、いろいろな動物などくらべたら、どれほど人間のほうに、心も姿も似ているかもしれない。それなのに、自分たちは、やはり魚や動物などといつしよに、冷たい、暗い、気の滅入りそうな海の中に暮らさなければならぬというのは、どうしたこ

とだろうと思いました。(一)

このように母人魚は、自分たち人魚は人間とあまり姿が変わらず、魚や海の動物に比べ人間に近いと考えている。(冷たい、暗い、気の滅入りそうな海の中)に暮らす自分たちとは違って、人間は(へにぎやかな、明るい、美しい町)に住んでおり、世界で一番やさしい存在であるから、人間の世界に子供を産み落とせば、自分の子供は人間の仲間入りをして幸せに暮らすことができる¹⁾と信じて疑わない。母人魚は「人間以外」である自分を自覚しているが、(私たちは、みんなよく顔が人間に似ているばかりでなく、胸からは人間そのままなのであるから)というように「人間」との境界線をまたぐことも可能であろうと考えている。「人間」と「人間以外」を区別する視線を持ちながら、人間のやさしさに期待を寄せることでそれをばやかしてい

るのである。だが実際に人間のやさしさは区別を越えることができたのだろうか。

第二として、娘人魚を拾い育てる老夫婦は、娘人魚のことをどう捉えていたか見てみたい。

・「かわいそうに、捨て子だが、だれがこんなところに捨てたのだろう。(中略)きっと神さまが、私たち夫婦に子供のないのを知って、お授けになったのだから、帰っておじいさんと相談をして育てましょう」(二)

・「これは、人間の子じゃあないが……」と、おじいさんは、赤ん坊を見て頭を傾けました。(中略)

「いいとも、なんでもかまわない。神さまのお授けなされた子供だから、大事にして育てよう。きっと大きくなったら、りこうな、いい子になるにちがいない」と、おじいさんも申しました。(二)

・「うまいはずだ。人間ではない、人魚が描いたのだから」(三)

いずれも娘人魚についてのおばあさん、おじいさんのせりふである。

おばあさんははじめ、人魚とは知らずに捨て子を拾う。(へかわいそう)という感覚は「人間」の中でなら確実に働く。この感情は母人魚の期待した人間のやさしさに他ならないが、単純にやさしさが「人間」と「人間以外」の区別を乗り越えたとはいえない。この捨て子が「人間」ではない人魚と分かった時、捨て子を育てることに対し迷いが生じた老夫婦は、(へ神さまのお授けなされた子供だから)と神さまを根拠として娘人魚を育

てる決意をする。母人魚の期待した人間のやさしさは存在したものの、「人間」と「人間以外」を区別する視線を越えるほどの強さはなく、そのまたぎを可能にしたのは神さまの存在であると考えられる。老夫婦は娘人魚に対し(へ人間ではない)という視線を持ち続け、娘人魚が(へ神さまのお授け子)でなくなった途端に売ってしまう。最終的に老夫婦から人間のやさしさは完全に消えてしまった。

第三に、母人魚によって人間の世界に産み落とされ、老夫婦に拾われた娘人魚は、人間の中にいる自分をどう捉えていたのだろうか。

・ 娘は、大きくなりましたけれど、姿が変わっているの、恥ずかしかがって顔を外へ出しませんでした。(三)

・ 「こんな、人間並でない自分をも、よく育てて、かわいがってくださったご恩を忘れてはならない」(三)

娘人魚は、自分の(姿が変わっている)ことを自覚し、(人間並でない自分)を引け目に感じている。そんな自分をかわいがって育ててくれた老夫婦の恩に報いなければと懸命に働くが、人魚である自分の本来の居場所である海を恋しく思っていた。娘人魚にとって人間の世界は自分の居場所ではなかったのである。「人間」と「人間以外」である自分を区別する視線は、娘人魚の中にもはっきりと存在している。

第四に、老夫婦に対して人魚は(へ吉なもの)であると吹き込み、人魚を見世物にして金を儲けようとする香具師の、人魚に対する視線はどうであらうか。

・ 香具師は、どこから聞き込んだきたものか、または、い

つ娘の姿を見て、ほんとうの人間ではない、じつに世に珍しい人魚であることを見抜いたものか、ある日のこと、こっそりと年寄り夫婦のところへやってきて、娘にはわかっていないように、大金を出すから、その人魚を売ってほしくないかと申ししたのであります。(四)

このやさしい人魚も、やはり海の中の獣物だといふので、とらや、ししと同じように取り扱おうとしたのであります。ほどなく、この箱を娘が見たら、どんなにたまげたでありますでしょう。(四)

このように、香具師は「ほんとうの人間ではない、じつに世に珍しい人魚」を、大金を出してでも手に入れたいと考えた。さらには娘人魚を「海の中の獣物」として、虎や獅子、豹等と同じように扱った。ここには「人間」と「人間以外」という区別が最もはっきり生じている。

そしてこれは、香具師一人の視線ではない。香具師の背後には、見世物小屋に集まるであろう大勢の人間の視線が存在する。大勢の人間にとって人魚とは、一目見ればすぐにそれと分かるほど有名であるが、実際に見た者はいないという大変貴重な存在である。だが、決して獐猛でない娘人魚が虎や獅子といった猛獣と同じように檻に入れられたのはなぜなのか。それは、危険だからというだけではなく、檻に入れるという行為自体が、その対象を人間の支配下に組み入れたことを意味しているからではないだろうか。見世物の価値は、ただ珍しいというだけではなく、人間の世界にまだ組み入れられていないものを、人間の手によって支配したということにある。人魚に見世物として

の価値を見出した香具師の視線は、見世物小屋に集まるであろう大勢の人間の視線を予測し、代行する視線といえる。香具師が代表する大勢の人間にとって、虎も人魚も同じ「人間以外」の存在なのだ。

これまで見てきたように、「人間」と「人間以外」である人魚の間で、両者が「同じ」ではないことは、全員が共有していた。その中で母人魚だけは無関係の両者を結びつけ、人間のやさしさによって「人間」と「人間以外」を区別する視線を越えられると思っていた。そして実際に老夫婦はその区別を越えて一時は娘人魚をわが子のように育てる。しかしその根拠となつた(「かわいそう」というやさしさには、「神さまの罰」あるいは「神さまのお授け子」という形で、いつの間にか神さまが介入していた。老夫婦が人魚を「人間」と「人間以外」のどちらに位置づけるかの鍵を握っていたのは神の存在であった。対して香具師は最初からまったくの別物として人魚を捉え、人魚を檻に入れたまま人間の世界に組み入れ、支配しようとした。

このように、人魚という存在を捉える時、それぞれの立場によって考えが異なってくる。人間にも魚にも近いのに、そのどちらでもない人魚という設定が、「人間」と「人間以外」を区別する視線とその食い違いによって、「赤い蠟燭と人魚」という作品を動かす原動力になっているのは間違いないだろう。

さて、「人間」と「人間以外」の違いを共有しながら唯一その区別を越えた老夫婦が、「神さまのお授け子」でなくなった途端に娘人魚を売ることから考えても、神さまが老夫婦の「人間」と「人間以外」を区別する視線に大きな影響を与えている

ことは疑いない。次からは、「人間」と「人間以外」を区別する視線に「神さま」が及ぼした影響についてさらに詳しく考えてみたい。

老夫婦と神さま——娘人魚を巡って——

ここからは、老夫婦が娘人魚を拾い育てる過程での心の動きを追うことで、「神さま」が「人間」と「人間以外」を区別する視線に及ぼした影響についてあらためて見ていくことにする。お宮へおまいりをして、おばあさんは山を降りてきますと、石段の下に、赤ん坊が泣いていました。

「かわいそうに、捨て子だが、だれがこんなところに捨てたのだろう。それにしても不思議なことは、おまいりの帰りに、私の目に止まるというのには、なにかの縁だろう。このまに見捨てていつては、神さまの罰が当たる。きっと神さまが、私たち夫婦に子供のいのを知って、お授けになったのだから、帰っておじいさんと相談をして育てましょう」と、おばあさんは心の中でいって、赤ん坊を取り上げながら、

「おお、かわいそうに、かわいそうに」といって、家へ抱いて帰りました。

おじいさんは、おばあさんの帰るのを待っていますと、おばあさんが、赤ん坊を抱いて帰ってきました。そして、一部始終をおばあさんは、おじいさんに話しますと、

「それは、まさしく神さまのお授け子だから、大事にして育てなければ罰が当たる」と、おじいさんも申しました。

二人は、その赤ん坊を育てることにしました。その子は女の子であったのです。そして胸から下のほうは、人間の姿でなく、魚の形をしていましたので、おじいさんも、おばあさんも、話に聞いている人魚にちがいないと思いましたが。

「これは、人間の子じゃあないが……」と、おじいさんは、赤ん坊を見て頭を傾けました。

「私も、そう思います。しかし人間の子でなくても、なんと、やさしい、かわいらしい顔の女の子ではありませんか」と、おばあさんはいいました。

「いいとも、なんでもかまわない。神さまのお授けなされた子供だから、大事にして育てよう。きっと大きくなったら、りこうな、いい子になるにちがいない」と、おじいさんも申しました。

その日から、二人は、その女の子を大事に育てました。

(二)

お宮のおまいりに用いられる蠟燭を商って生計を立てている老夫婦は、自分たちが生活できるのを《神さまのお蔭》と考え、日頃の感謝を伝えるためのおまいりを思い立つ。その帰り道、おばあさんは捨てられた赤ん坊を見つけ、《かわいそう》という人間として当然の感覚を抱く。だが、おまいりの帰りに自分の目に止まったのは《なにかの縁》だと思つた途端、このまに見捨てたら《罰が当たる》という思いに駆られる。神さまのお蔭で生活できていると考える老夫婦が神さまの罰を怖れるのは当然である。捨て子を育てる決心をしたおばあさんの心には再

び（かわいいそう）という感情が戻ってきて、ここではおばあさんの中に（かわいいそう）と（罰が当たる）という思いが混在し、めまぐるしく入れ替わっているように見える。

だがここで、この場面における優劣関係について考えてみたい。（かわいいそう）であるから手を差し伸べようというのは、背後に優位者から劣位者への上下関係が見え隠れしている。捨てられた赤ん坊は、自分の力では何もできず、そのまま放置すれば死んでしまうほど非力な存在である。この時赤ん坊は、おばあさんに対して圧倒的に劣位に位置づけられているのである。そしてここに、立場が逆転する可能性は存在しない。（かわいいそう）という状況の背後には不動の上下関係が存在しているのである。

ところが、（罰が当たる）という時には、（かわいいそう）というところで見られた、優位な立場にあるおばあさんが、圧倒的劣位の立場にある赤ん坊に手を差し伸べるといふ上下関係が、逆転する可能性が含まれている。もし赤ん坊が神さまのお授け子ならば、赤ん坊は老夫婦よりも神に近い存在といえる。自分の力では何もできない赤ん坊が、老夫婦よりも優位に立つのである。「神さま」は、「人間」と「人間以外」という視線を取り払うだけでなく、優劣関係の逆転さえ可能にしていたのである。だとすれば（かわいいそう）と（罰が当たる）という思いはいつまでも混在し得ないだろう。

捨て子を育てると決めた後で、老夫婦はその子が人間でないことに気付く。それ故おじいさんは娘人魚を育てることのためにらいをみせるが、二人にとってその子はすでに（神さまのお授

け子）であり、（罰が当たる）怖れがあるため捨てることはできない。老夫婦は捨て子を大事にして育てるしかないのである。（かわいいそう）という感情は（罰が当たる）ことへの怖れの裏側に隠れてしまっている。

これまで見てきたように、老夫婦が捨て子を拾い育てる過程において「神さま」が老夫婦に与えた影響は甚大である。「神さま」は「人間」と「人間以外」を区別する視線を取り払い、不動に思われた優劣関係を逆転させさせた。だが、（かわいいそう）な愛らしい劣位の存在としてではなく、（神さまのお授け子）だから育てる、というように「神さま」の存在による感情の塗りつぶしが起きていることも見逃せない。そして同様の塗りつぶしは、作品の別の場所でも起こってくる。感情を塗りつぶしてしまふほど影響力のあるこの「神さま」とは一体どのような存在なのか。次からは、作中の「神さま」という存在について詳しく見ていきたい。

神さまとは何か

作中における「神さま」という存在について考えた時、「神さま」には二面性があることに気付く。超越的な大いなる存在としての神さまと、現世的利益に結びつけられた神さまである。人々は超越的な存在である神さまへの畏敬の念からおまじりをし、一方で、（ありがたい神さま）というように現世的利益に結びつけられた神の姿がある。現世的利益の一つはたとえお金である。

「私たちが、こうして暮らしているのも、みんな神さまの

お蔭だ。この山にお宮がなかったら、ろうそくは売れない。私どもは、ありがたいと思わなければなりません。そう思ったついでに、私は、これからお山へ上つておまいりをしてきましょう」(二)

〈神さまのお蔭〉で暮らしていると考える老夫婦にとつて、お宮は生活の糧であり、神さまはお金と結びついている。老夫婦にとつて神さまは、お金という利益をもたらしてくれる存在なのだ。それ故に〈神さまの罰〉が当たり、お金という現世的利益が失われることを何よりも怖れている。もともとは大いなる存在として崇められていたはずの神さまの姿はここにはなく、神さまは人間世界における利害のレベルへと引き下げられてしまっている。ただ、神さまは罰を下すだけの得体の知れない力があるという認識はあるといえる。神さまが人間世界の利害のレベルに引き下げられている一方で、作中では、人間を超えたものへの畏怖や賞賛が、次のように書かれている。

娘は、赤い絵の具で、白いろうそくに、魚や、貝や、または海草のようなものを、産まれつきで、だれにも習ったのではないが上手に描きました。おじいさんは、それを見るとびっくりいたしました。だれでも、その絵を見ると、ろうそくがほしくなるように、その絵には、不思議な力と、美しさとがこもっていたのであります。

「うまいはずだ。人間ではない、人魚が描いたのだもの」と、おじいさんは感嘆して、おばあさんと話し合いました。

(三)

ここでは人魚は人間を超越した神秘的な存在として描かれる。

人魚の絵には〈不思議な力と、美しさ〉という現世的利益に還元できない、人間の力を超えた何かがあり、大いなる存在である、本来的な神さまの姿と重なる。だが、この〈人間ではない〉ものの力は、超越的であったが故に人々には現世的な利益をもたらすお宮の神さまの力として捉えられてしまう。そして人魚の力もまた、すぐに現世利益化されてしまう。

そもそも娘人魚の力とはどのようなものであつたのだろうか。娘人魚は、〈きれいな絵を描いたら、みんなが喜んで、ろうそくを買うだろう〉と思い、蠟燭に絵を描くことを思いついた。そして〈だれでも、その絵を見ると、ろうそくがほしくなるように、その絵には、不思議な力と、美しさとがこもっていた〉ために、この蠟燭はみんなに受け、娘人魚の願いどおりになつた。だが、この蠟燭をお宮に上げ、燃えさしを身につけて海に出ると災難がない、という噂が立つと、人々は次のように言った。

海の神さまを祭つたお宮さまだもの、きれいなろうそくをあげれば、神さまもお喜びなさるのにきまつている(三)

町の人々にとつて、お宮の神さまは航海の安全という現世的利益をもたらしてくれる存在である。この時点で、娘人魚の蠟燭の力は神さまの力へ吸い上げられ、美しい蠟燭に神さまが喜んでご利益があるといった話に変化してしまう。娘人魚の蠟燭は、現世的な部分を超えた高貴さを持つていたのに、〈美しい〉ものから〈ありがたい〉ものという利害関係に転化されてしまうのだ。みんなを喜ばせたい、という娘人魚の根源的な思いは、神さまの存在によつて消される。これは、おばあさんが娘人魚

に對して抱いた（かわいそう）という感情が神さまの存在によつて消された構図と似ている。手の痛くなるのも我慢して絵を描き続けた娘人魚のがんばりは誰にも評価されない。やがてみんなを喜ばせたい、という根源的な思いは、恩に報いなければ、という義務感にすりかわつてしまう。

「ほんとうに、ありがたい神さまだ」という評判は、世間になちました。それで、急にこの山が名高くなりました。

(三)

ありがたいとの評判の源をずっと辿つて行くと、みんなに喜んでもらいたいという娘人魚の根源的な思いに辿り着くのに、何の力も發揮していない神さまは名高くなり、自分のがんばりを神さまに吸い上げられてしまった娘人魚は、疲れはてて海を恋しく思うようになる。神さまと重なりながらもその存在を消されてしまった娘人魚は、彼女を買おうとする香具師の登場によつてさらに立場を失つていく。

「昔から、人魚は、不吉なものとしてある。いまのうちに、手もとから離さないで、きつと悪いことがある」と、まことしやかに申したのであります。

年より夫婦は、ついに香具師のいうことを信じてしまいました。それに大金になりますので、つい金に心を奪われて、娘を香具師に売ること約束をきめてしまったのであります。（四）

超越的な力を發揮しながらも神さまによつて存在を消されてしまった娘人魚は、香具師の登場によつて（神さまのお授け子）から（不吉なもの）へと転換させられてしまう。老夫婦が

娘人魚を売らないのは、娘人魚を（神さまのお授け子）と考え、娘人魚を見捨て（神さまの罰）が当たることで神さまによりもたらされるお金という利益が失われるのを怖れているためである。しかし人魚が（不吉なもの）であるなら老夫婦が娘人魚を育てる理由はない。頭の良い香具師は、娘人魚を（不吉なもの）とすることで、その論拠を崩壊させたのである。（かわいそう）から（神さまのお授け子）への感情の塗りつぶしは前章で確認したが、ここで娘人魚はさらに（不吉なもの）へと上書きされる。よしんば不吉なものでなかったとしても、大金になるのならば神さまによる利益がなくなつても生活でき、老夫婦にはもう現世的利益をもたらず神は必要なくなる。（神さまのお授け子）を育てる必要性も当然なくなるのだ。ここには、神さまの意思を自分の欲望に従つて都合よく解釈し、現世的な利害によつて信じるものを決める身勝手な人間の姿が読み取れる。そして老夫婦は、かつて怖れた（神さまの罰）をかえりみず娘人魚を売る約束をしてしまう。

おばあさんは、すこしでもお金がかうことなら、けつして、いやな顔つきをしませんでした。（五）

神さまにお金という現世的利益をもたらしってもらう必要性がなくなり、ただ金を儲けることに心を奪われているおばあさんにとつて、もはやお金が全ての判断基準となつていたが、それも長くは続かない。

不思議なことには、その後、赤いろうそくが、山のお宮に点つた晩は、いままで、どんなに天気がよくても、たちまち大あらしとなりました。それから、赤いろうそくは、

不吉ということになりました。ろうそく屋の年より夫婦は、神さまの罰が当たったのだといって、それぎり、ろうそく屋をやめてしまいました。(五)

お金を全ての判断基準としていた老夫婦だったが、大あらしを(神さまの罰)と考え、神の存在を再認識し蠟燭屋をやめる。二人が蠟燭屋をやめざるを得なくなったことだけを捉えれば、神さまの罰と考えることも一応は可能かも知れない。しかし作品ではこの後、現世的利益故に信仰を集めていた神さまが見捨てられ、人間の町も滅びを迎える。これらすべてを神さまの罰だということはできない。神さまと現世的利益を結び付けて考えた老夫婦が、蠟燭屋をやめるという形で作品から退場することとは、この作品における人間と現世的利益の実現者としての神さまの話の終焉を意味している。そしてここから先は、人間の理解を超えた、人間外の領域の中に実現してくる話と考えられる。そこには、超越的な力を持つ神さまが不気味さを伴って現れてくる。

昔は、このお宮にあがった絵の描いたろうそくの燃えさしさえ持つていけば、けつして、海の上では災難にはかからなかったものが、今度は、赤いろうそくを見ただけでも、そのものはきつと災難にかかって、海におぼれて死んだのであります。

たちまち、このうわさが世間に伝わると、もはや、だれも、この山の上のお宮に参詣するものがなくなりました。こうして、昔、あらたかであった神さまは、いまは、町の鬼門となつてしまいました。そして、こんなお宮が、この

町になければいいものと、うらまぬものはなかつたのであります。(五)

かつてあらたかであったお宮の神さまは町の鬼門となり、恨まれ、人々から見捨てられてしまう。人間世界における神さまは、超越的な大いなる存在としての神と現世的利益をもたらす存在としての神という二面性を持ち、そのうち現世的利益をもたらしてくれる神のみが信仰の対象となっていた。だが作品終盤で現世的利益をもたらす存在としての神は失われ、代わりに人知を超えた大あらしを引き起こす、真の超越的存在としての神が顔を出す。

そんな中、人々に恨まれ、ついには見捨てられたお宮に赤い蠟燭は点り続ける。蠟燭を上げているのは、娘を失った母人魚であろう。仮に、母人魚が復讐のため、神の力を借りようとしているとしたら、人魚が願う内容は願望の実現を求める(人間の世界を自分の希望通りに動かしたい)という意味で、人間と同じになってしまう。つまり、人魚が求めているのは人間世界における現世的利益をもたらす神ということになる。神が人間ではなく人魚の願いを叶えるようになったというのでは、対象を変えて同じことを繰り返しているにすぎず、この作品世界には現世的利益をもたらす神しか存在しないことになる。だが作品では、現世的利益をもたらす神はずでに失われている。そして畠山氏も指摘したように、(人間の力を越えた不気味なものを含む)む結束部分には、超越的な存在としての神が現れている。先行研究でいわれるように結末を人魚の復讐と読んでしまつては、現世的利益をもたらす神の退場は、説明がつかなくなつ

てしまう。ここでは、母人魚が向かっているのは、現世的利益をもたらず神に代わって現れてきた真の超越的存在としての神であり、母人魚が向かう目的は復讐ではない、と考へるべきであろう。それでは母人魚は、何を求めて蠟燭を上げるのか。次章ではこのラストシーンについて検討してみたい。

ラストシーンの解釈

ラストシーンを解釈するにあたり、まずは作中で母人魚がとつた行動を整理しておきたい。母人魚が明らかに登場するのは第一章だけである。第一章において母人魚はおなかの中にいる我が子の幸せを願う気持ちから、子供を陸に産み落とす決意をする。この人間の世界を求めた母人魚は、どこに娘を産み落としたであろうか。

お宮へおまいりをして、おばあさんは山を降りてきますと、石段の下に、赤ん坊が泣いていました。(二)

このように、母人魚が子供を産み落としたのは〈石段の下〉である。この点に留意しつつ、次は第五章を見てみたい。

第五章で蠟燭を買いに来たり、お宮に蠟燭を上げたりする者について作品はそれが誰なのか語らない。しかし多くの先行研究でいわれてきたように、この人物は母人魚と読むのが自然であろう。

母人魚と思われる女が赤い蠟燭を買いにきた夜、急に空模様が変わり町は大暴風雨にみまわれる。その後お宮に赤い蠟燭の点つた晩はたちまち大あらしとなり、赤い蠟燭は不吉とされ、老夫婦は蠟燭屋をやめる。

しかし、どこからともなく、だが、お宮に上げるものが、たびたび、赤いろうそくがとまりました。(五)

真つ暗な、星もみえない、雨の降る晩に、波の上から、赤いろうそくの灯が、漂って、だんだん高く登って、いつしか山の上のお宮をさして、ちらちらと動いてゆくのを見たものがあります。(五)

ここで注目したいのは母人魚が〈山の上のお宮〉に向かっている点である。物語の冒頭では〈石段の下〉に娘人魚を産み落とした母人魚であるが、このラストシーンでは石段を登った〈山の上のお宮〉に蠟燭を上げてている。〈石段の下〉と〈山の上のお宮〉、この両者の違いが意味するものとは一体何なのか。

まず、〈石段の下〉とはどのような場所であろうか。〈石段の下〉には人間の暮らす町があり、「人間の世界」と言い換えることができるだろう。冒頭で母人魚は子供が〈人間の仲間入り〉をして、幸福に生活をすることを望んでいたもので、〈石段の下〉にある人間の世界に娘人魚を産み落としたのである。

それでは、〈山の上のお宮〉とはどのような場所であろうか。石段を登った上にあるお宮は、人間の世界のもう一段上にある「神さまの世界」というべき場所であろう。人間世界への幻想が破れ、すがるものを失った母人魚はここで、子を失った悲しみを癒し、自分の愚かさへの後悔を静めてくれる存在として神を欲していたのではないだろうか。

作品冒頭における母人魚は、超越的な何かに思いをめぐらせることなく、ただただ「人間の世界」に焦がれ、その中で娘が幸せになつてくれることを願っていた。しかしその幻想を打ち

砕かれた後のラストシーンでは、母人魚が海から上がり「人間の世界」をカットして、神に祈る様子が描かれている。かつて人間たちがしたように、母人魚は赤い蠟燭を手におまいをする。人間たちと違うのは、現世的利益の有無だ。かつて母人魚は、(石段の下)に子供を産み落とすことで、確かに現世的利益を願っていた。しかしその願いが無残にも打ち砕かれた後では、娘の幸せを願って自分がしてしまったことを悔やむ気持ちから、いわば心の拠りどころとして超越的なものを欲し、するのである。現世的な利益とはかけ離れた母人魚の根源的な思想が、神に現世的利益を求め続けた「人間の世界」を飛び越えて、「神さまの世界」を求めたのが、このラストシーンではないか。

この作品を母人魚に即して考えれば、人間が現世的な利益に気を取られて忘れてしまった超越的存在としての神を、人間に代わって人魚が信仰するようになるという「本来の神さまのよみがえり」ともいえる構図がみえてくるのではないだろうか。人間の力をこえた不気味なものを含む神の前では、悔恨で自分を捧げるしかないのである。

一方で、人間の側からこのラストシーンを考えてみる。人魚による「本来の神さまのよみがえり」ともいえる構図が描かれるのと同時に、人間の町が減びるということは、何を意味しているのだろうか。「人間の世界」における神さまには二面性があった。超越的な大いなる存在としての神さまと、現世的利益に結び付けられた神さまである。人間の力を超えた、超越的存在としての神さまは、最初は確かに存在していたはずだ。

しかし、神さまは次第に人間世界の次元での現世利益をもたらしにくれるかどうかによってその価値を判断されるようになってしまった。根源的な思いではなく、お金や航海の安全など人間世界での利益が人々の信仰を左右するのである。神さまは人間によって、超越的存在としての神さまから、利益をもたらしてくれるかどうかの神さまへと、さらにいえば「神さま」の世界から「人間」の世界へと引き下げられてしまったのである。そして、人間世界がある限りこれは繰り返される。もし、これを繰り返させないために人間の町が減びるのだとすれば、この結末にはある種の絶望もまた描かれているといえるだろう。

この作品の中には、人間に絶望した後に、本来の神さまをよみがえらせるものとして、人魚がいるのである。

注1 古田足日「近代童話の崩壊」(初出「小さい仲間」第

五号、一九五四年三月)。引用は古田足日「現代児童文学論」、一九五九年九月、くろしお出版による。

2 山室静「小川未明とアンデルセン」(初出「日本児童文学」昭和三十六年一〇月)。引用は上笹一郎編「小川未明論集」、一九九三年六月、日本図書センターによる。

3 関口安義「小川未明「赤い蠟燭と人魚」」(小川英晴・上笹一郎・砂田弘編「未明童話の世界」、平成一四年三月、大空社)

4 島山兆子「小川未明「赤い蠟燭と人魚」の研究——「義憤」系列作品における位置——」(「国語教育学研究

- 誌」第二号、一九七七年二月)
- 5 本多真由美「小川未明の世界「赤い蠟燭と人魚」
〔活水日文〕第一八号、一九八八年三月)
- 6 木村小夜「小川未明「赤い蠟燭と人魚」とその周辺」
〔福井県立大学論集〕第二九卷、二〇〇七年七月)
- 7 引用は「小川未明童話集」(昭和二六年一月、新潮社)による。

(第四二回卒業生)